肥後歴史散歩

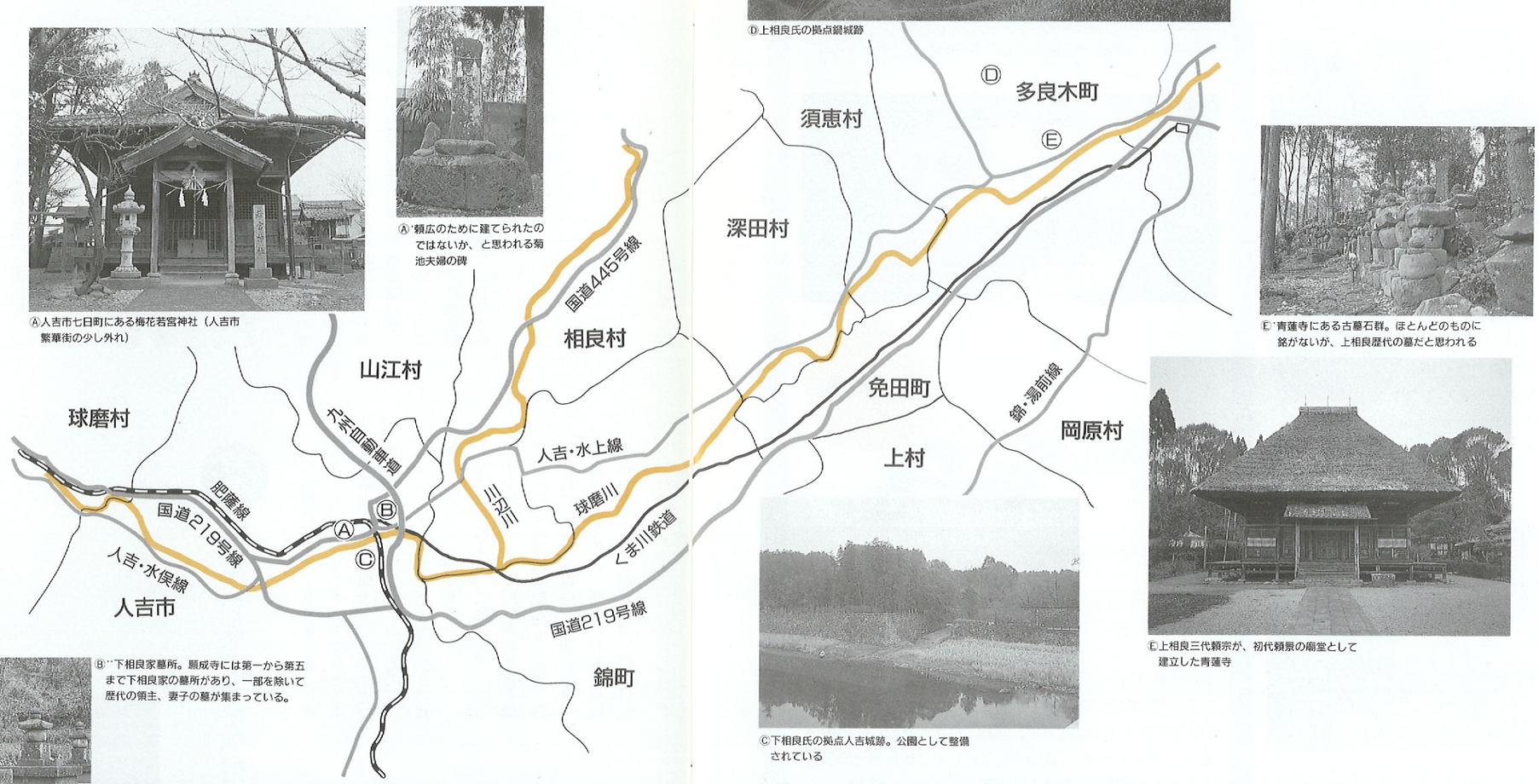
戦国の世から近世を生き抜いた
――相良一族――

九州山地に囲まれた山里人吉・球磨。鎌倉時代に初めてこの地に赴いて以来、明治維新までの七百年余りの永い間、深山の地を治めてきた一族がいます。それが相良一族です。

彼らは動乱の戦国時代から近世、近代までを生き抜いた、全国的にも極めてまれな存在です。

今回の肥後歴史散歩は、相良一族の足跡を訪ねます。

Ⓓ上相良氏の拠点鎌城跡



Ⓔ'青蓮寺にある古墓石群。ほとんどのものに銘がないが、上相良歴代の墓だと思われる

Ⓔ上相良三代頼宗が、初代頼景の廟堂として建立した青蓮寺

Ⓒ下相良氏の拠点人吉城跡。公園として整備されている

相良七百年の歴史

相良氏が初めて球磨の地を訪れたのは鎌倉時代、建久四年(一一九三)。初代頼景が源頼朝の挙兵に際し、非協力的な態度を取ったため、遠江国(現在の静岡県)から多良木荘(現在の多良木町周辺)に下されたのであった。しかしその後頼朝公の怒りも解け、頼景の長子長頼が建久九年(一一九八)人吉荘を授かった。こうして多良木荘を所領とする上相良氏と人吉荘を所領とする下相良氏が成立したのである。

南北朝時代から戦国時代にかけては、上相良氏と下相良氏の二派に分かれて一族が争い合ったが、下相良の一族であった永留長続が文安五年(一四四八)、上相良を滅ぼして球磨を統一。次第に郡外にも勢力を伸ばしていった。この間にも一族内の争いは繰り返されたが、一八代義陽(?~一五八一)のころには薩摩、大隅、芦北、八代、天草にまで威勢を誇った。しかし、南九州の強大な島津氏が北上するに及び、抗し切れず、島津氏の傘下に入った。

豊臣秀吉の九州征伐に対しても島津軍として参戦。敗れたが球磨郡の旧領のみは安堵された。以来江戸時代を経、明治維新まで、その命脈を保ったのだった。

史上から消えた頼広

相良氏の永い歴史の中には、様々な謎の部分がある。建武三年(一三三六)足利氏が反建武中興の動きを明確にする前後、下相良氏の史上からこつ然と姿を消した五代頼広のことも、その一つである。

頼広は、建武朝廷が成立してから鎌倉幕府に没収された所領の返還を要請したり、北条氏の残党との戦いに出陣した記録が残されている。しかし建武二年(一三三五)の足利氏からの軍勢催促状は子の定頼にあてられており、これ以降頼広は影も形も見えなくなっている。

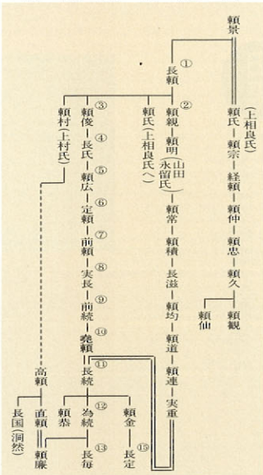
現在、人吉市五日町に下相良六代定頼が建立したと伝えられる梅花若宮神社がある。その縁起には諸説あるが、相良氏の庶流永留氏ゆかりの菊池夫妻という人物が、専横のあまり夜討ちにかけられ、その霊を鎮めるために建てられたという。しかし、永留家ゆかりの霊を相良家の定頼が鎮めるというのは不自然で、夜討ちに合い祀られているのは頼広ではないかと考えられる。

歴史上から消えてしまった頼広は、南朝方に就く気配のあること、また父長氏が嫡流相続とした所領を再び子女に分割相続してしまったなど、数々の要因が重なり合って父長氏と子定頼の反感を買い、謀略的に葬られたのではないか。頼広の消息が突然消えてしまった裏には、大きな謎が隠されているようである。

Ⓐ人吉市七日町にある梅花若宮神社(人吉市繁華街の少し外れ)

Ⓐ'頼広のために建てられたのではないか、と思われる菊池夫婦の碑

相良氏略系図



Ⓑ下相良家菩提寺願成寺

Ⓑ''下相良家墓所。願成寺には第一から第五まで下相良家の墓所があり、一部を除いて歴代の領主、妻子の墓が集まっている。

南北朝期の相良一族

さて、家督を継いだ定頼はいち早く北朝方に味方し、建武中興で赴任してきた代宮の菊池氏を球磨から追い出した。しかし上相良家は南朝方に就く姿勢を見せ、上相良と下相良は真向うから対立することになった。両氏は木枝城(上相良)と山田城(下相良)を拠城に激しい戦いを展開。興国三年(一三四二)木原原合戦において、定頼は上相良に大打撃を与え、上相良氏は本領安堵を条件に北朝方に転じた。ここに球磨郡内の動乱は一応の収拾を見る。

中央の政局不安定を反映し、九州内でも多くの氏族が離反と帰順を繰り返していた。相良一族も例外ではなく、この後再び南朝方に転向。幾多の戦乱を通して、巧みに一族の所領を拡大していったのだった。

参考文献
「上相良藩興亡史」園田健昌著
「新相良史話一・二」信国正史著

Ⓑ'願成寺の裏手にある下相良家一代長頼の墓